

## 有島武郎と朝鮮

— 交流関係を中心に —

奥村裕次\*

## || 차례 ||

- 1.はじめに
2. 朝鮮観とその思想
3. 朝鮮に対する認識
4. 朝鮮人との交流関係
5. おわりに

## 【日文抄録】

有島武郎(1878-1923)は人道主義者であり、思想的には無政府主義を信奉していたことが知られている。それゆえ明治維新以来の日本政府の帝国主義的な政策に対して一貫して批判的だった。当時の知識人としては異質で、朝鮮に対しても彼らとは異なった認識を持っていた。本稿では有島の国家観とその思想を中心として検証し、加えて当時の朝鮮をどのように捉えていたかを見ていくことにする。そして今まで具体的に検証されてこなかった朝鮮人との交流関係について見ていく。

有島と交流のあった朝鮮人の中で確認が可能なのは、手帳に記録されている李弼昊と蔡順乗、日記に名前が出てくる李英實の3人だった。彼らは一様に朝鮮の独立のために何らかの活動していた人物達であった。有島は一貫して朝鮮の植民地政策には反対であったが、そうした考えを公言することはなかった。しかし、危険な行為であることを自覚しながら活動家達を援助したのは、信念に基づいての行動であり、彼が取り得る最大限の実行であったと、考えられる。

**主題語:** 朝鮮, 反国家主義, 無政府主義, 朝鮮の独立, 李弼昊, 蔡順乗, 李英實

\* 慶南大學校 日語教育科 助教授, wakuwaku78@hotmail.com

## 1.はじめに

有島武郎(1878-1923)は人道主義者であり、思想的には無政府主義を信奉していたことが知られている。それゆえ明治維新以来の日本政府の帝国主義的な政策に対して一貫して批判的だったし、したがって朝鮮の植民地化にも反対だった。有島は当時の知識人の中でも柳宗悦と供に異質な存在だったと言えるだろう。では、なぜ彼はそのような存在とったのか。1903年8月に有島は留学でアメリカに旅立っているが、時を同じくして日露戦争が勃発した。有島は日本中が戦勝報道に沸きかえっているとき、アメリカでその報道に接していたのである。日本ではない異国の地で戦争を客観的に捉えることができ、冷静にその成り行きを見守ることができた。また、アメリカの地でクロボトキンの無政府主義に傾倒し、当時、世界を支配していた帝国主義の本質を見抜いて批判的立場にあった。だからこそ有島は「日露戦争は中国・朝鮮の権益をめぐる戦争だ」との確信を持ち得たのである。当時の知識人が帝国主義の政策に同調していたことを考えると確かに異質であった。

だから、有島は日本政府が進める朝鮮政策に対して「朝鮮を助けるという口実のもとに、日本はかの国を強く支配して、その内閣を傀儡にしまった」<sup>1)</sup>と嘆いている。こうした朝鮮に対する理解は人道主義的な立場からの同情ばかりではなく、柳宗悦からの影響が多分にあったものと考えられる。有島は柳宗悦から朝鮮についての話を聞いていたし、実際、柳宗悦が「朝鮮民族美術館」を建てようと、設立基金の調達のために企画した音楽会にも50円を寄付しており<sup>2)</sup>、協力的だった。また、有島は晩年に満韓旅行<sup>3)</sup>を計画

1) 「我が国と朝鮮との関係については、詳細にお話するのも恥ずかしいです。朝鮮を助けるという口実のもとに、日本はかの国を強く支配して、その内閣を傀儡にしまったのです。」

有島武郎, 「ティルダ・ヘック宛書簡(1907.7.18.)」, 『有島武郎全集』第十三巻, 筑摩書房, 1982, p.765

2) 金希貞, 「한국에 있어서의 아리시마다케오(有島武郎)의 수용양상」, 『日本語文学』第70輯, 2016, p.219 再引用

し、それを非常に楽しみにしていたことなど、朝鮮に対する関心が高かったことが伺われる。さらに晩年、朝鮮からの留学生たちとの交流があったことが日記などを通して確認できる。ただ、交際はあったものの、それが誰だったのかについて、これまで具体的な検証はなされてこなかったように思う。有島が当時の朝鮮をどのように見ていたのか、或いは朝鮮との接点はあったのかということは非常に興味深いテーマだといえよう。したがって、本稿では有島の国家観とその思想を中心として検証し、加えて当時の朝鮮をどのように捉えていたかを見ていくことにする。そして今まで具体的に検証されてこなかった朝鮮人との交流関係について、可能な限り一人ずつ検証していくことにする。

## 2. 朝鮮観とその思想

有島の国家観は、いつ、どのように形成されていったのか。思想形成は複数の要素が関連し合っただけでなされているのであろうが、その幾つかの要素を整理して次に挙げてみることにする。

### 2.1 軍隊生活

まず、軍隊生活の経験が挙げられよう。徴兵を回避した夏目漱石、志賀直哉、武者小路らとは違い<sup>4)</sup>、有島は軍生活を経験している。この軍隊の入隊経験が有島に大きな影響を与えたのは間違いない。有島は軍隊の除隊を15日後に控えた時点で、日記『在營回想録』に「人ト人ト相争フ、世ハ之ヲ責ム。

3) 有島武郎, 「満韓旅行と個人雑誌」, 『有島武郎全集』第九卷, 筑摩書房, 1982, p.187

4) 夏目漱石も徴兵を回避するために一時、本籍を北海道の岩内に移している。また志賀直哉も柳宗悦の遠縁の軍医の口利で入隊を忌避した。手段があれば徴兵を忌避したいのが人情であるが、有島はそうはしなかった。

会社ト会社ト相争フ、世ハ之ヲ責ム。国家ト国家ト相争フ、世ハ謹シテ沈黙ヲ守ル」「何ノ権限国家ニアレバヨク此ノ如クオルヲ得ルヤ。退キ去レ悪魔! 人の子ヲ無ミスルモノ!」<sup>5)</sup>と書き、軍隊生活を強いる国家に対して強烈な嫌悪感を感じていた。有島はまた次のようにも書き残している。

「国家ト云フモノ程意義ノ邈莫タルモノハアラジ。虚栄心ト利己心トニ満チタル太古 以来ノ習慣ニヨリテ成立セル所謂国家ナルモノハ今モ尚恐怖ス可キ權威ノ苔ヲ握レルナリ。」(中略)

「国家トハ何ゾヤ。国家ニ対スル義務トハ何ゾヤ」(中略)

「何ノ權威国家ニアレバヨク此ノ如クナルヲ得ルヤ。退キ去レ悪魔! 人の子ヲ無ニス ルモノ!」(1902.11.15)

「我レ国家ヲ何ニ喩ヘンヤ。糞桶ノ蓋ノ如シ。又国家何喩。白塗墓如」(1902.12.31)

国家を「糞桶ノ蓋」と表現し、強い口調でそれを否定している。これは国の權威で国民の自由を奪い、軍隊生活を強いる国家権力に対する嫌悪感の表出だったと言えよう。それはまた、クリスチャンとしての信念から生まれた嫌悪感でもあった。そして同時に晩年まで続く国家批判の最初の現われだったといえよう。

### 2.2 トルストイの反戦論への共感

有島がアメリカに留学した期間(1903年8月-1906年9月)中に、日露戦争が勃発した。有島は1年間の兵役を終えて予備見習士官(軍曹)となっていたため、戦争は自らの将来を左右する切実な問題であった。有島は1904年9月26日の日記に「戦ノコナド思ヘバ寝台車取ランコモ覚エズシテ普通車ニ乗ル」と<sup>6)</sup>と書き、戦争の重みを肌で感じつつ長旅の夜を明かしているのである。そ

5) 有島武郎, 「在營回想録(観想録の一部)」, 『有島武郎全集』第十卷, 筑摩書房, 1981, pp.222-228

6) 有島武郎, 「観想録」, 『有島武郎全集』第十卷, 筑摩書房, 1981, p.506

して「招集されれば帰国する」と高平駐米公使に書き送った。こうした緊張状態にある時に、有島はトルストイの論評を読んで非常に感銘を受けた。

「此日兄ヨリ日本ノ或新聞ニ翻訳セラレテ現ハレタル Tolstoy ノ日露戦争観ヲ送り来ル。彼ノ好意ヲ謝スツヽ椅子ニヨリツヽ熱読シテ、今更ラニ深き impression ニ打ラヌ。(中略) 余ハ Tolstoy ノ文ヲ読ム毎ニ、真理此中ニアリト思ハザルコナシ。而シテ自ラハ従レニ是レガ実行者タルコト能ハス。Reason ヲ賛シテ此レヲ実行ニ付スル能ハザル苦痛ハ甚シキカナ。」(1904.9.7) 7)

キリスト教国家のはずのアメリカで反戦を訴える人がいないことに疑問を感じていた有島は、トルストイの戦争反対の主張にいたく感銘を受けた。意味のない戦争を引き起こす国家・権力というものに全く嫌気がさしていたのだ。だが、同時にそんな国家に対して何の抵抗もできず、何ら行動に移すことができない自分自身に対しても自責の念を感じていた。こうした葛藤・ジレンマは生涯に渡って有島を苦しめることになる。

### 2.3 日露戦争に対する認識

当時、アメリカの新聞による日露戦争報道は驚くほど大規模だったという。栗田は各紙は競って戦況を詳報し、写真・図版入りの大紙面が組まれたことを当時の資料を通して実証している<sup>8)</sup>。有島は日本とは違って公平で詳密な戦争報道をアメリカの地で知り得た。栗田が「ある意味で有島は、日本にいた日本人よりも遙かに正確に、また戦場の兵士たちよりもむしろ『全体として』、日露戦争を見ていたと言える。」<sup>9)</sup>と指摘しているように、それは特別な体験であった。他の知識人と違って、有島が日本ではなく外地で日露戦争の情報に触れていたことの意味は大きかった。

7) 有島武郎, 「観想録」, 『有島武郎全集』第十卷, 筑摩書房, 1981, p.496

8) この点については栗田広美, 『亡命・有島武郎のアメリカ』, 右文書院, 1998を参照

9) 栗田広美, 『亡命・有島武郎の青春』, 右文書院, 1998, p.34

こうした有島とは対照的だったのが、信仰の友・森本厚吉である。二人は共にアメリカに渡ったが、森本は有島とはまったく違った道を歩み、「戦う小国日本の理解と援助」をアメリカ国民に訴えて歩いた。クリスチャンとして反戦を訴えるかわりに、愛国者の一人として日本の代弁者となり、日本の勝利のために行動を起こしたのである。日露戦争を挟んで二人の間には大きな隔たりが生まれていたと言えよう<sup>10)</sup>。

それはまた新渡戸稲造も同様であった。新渡戸が『太陽』に寄稿した「日本帝国の膨張」(朝鮮植民地化賛美論)<sup>11)</sup>を読んで、有島は大いに失望した。大学時代から師として慕ってきた新渡戸のこの発言にショックを受け、「余ハ是ヲ読ミテ涙ヲナガセリ。(中略) 信ジタルモノヲ失フハ余ニ取りテ無上ノ苦痛ナレバナリ。」<sup>12)</sup>という悲痛な思いを日記に書いている。心情的には、もはや師と受け入れられなくなっていたのだ。

人は同様の体験をしたからといって同じ思想に行き着くわけではない。有島は異国の地でナショナリズムに傾倒することなく、また自分の信念を曲げることもなかった。有島は無二の親友とも恩師とも相容れない隔たりを強く感じたことは想像に難くない。

### 2.4 無政府主義への傾倒

有島は1904年にボストンで金子喜一と出会い、間違いなくその影響を受けている。そして共に労働者の集会に参加し、彼らに共感を覚えるようになった。更に、第一次ロシア革命に関心を抱き、憧憬を覚えるようになっていった。有島は社会主義革命を賛美し、ナロードニキ出身女性革命家を称賛する

10) 「我々は全く沈黙して汽車に乗り、ペンシルバニア駅に着いた。時が来たとき、お互いに握手をして別れた。(中略) 歳月が経つにつれ、彼と僕とは進む道がますます離れていこう。外面的な様相と理論的意見に関する限り、我々には共通なものが何一つないことはほとんど明白である」(1906.7.1)と日記に書いている。

11) 新渡戸稲造, 「日本帝国の膨張」, 『太陽』(1904.10.16、12.1), 『雑誌にみる近代日本の朝鮮認識1』に収録, 緑蔭書房, pp.282-289

12) 「観想録」(1905.1.5.) 前掲書, p.518

文章を「平民新聞」に寄稿している。そして1905年1月1日の日記に「今朝一時半マデカカリテ兄ニ送ル可キ書ヲ認ム。戦争ニ関シテナリ。余ガ非国家的思想ハ愈根底ヲ堅クシ来ルガ如シ」と書き、その思想が決定的となっていることが伺われる。そして「国家ヲ除去セヨ」と書き残した。

また有島はイブセンの思想や北欧文学へ傾倒し、進歩主義史観の受容へと急激な変化を遂げていったことが指摘されている<sup>13)</sup>。こうした思想に触れることで、戦争が「一部支配階級の利益擁護のために引き起こされた殺戮行為だ」との認識はより明確なものとなった。

西垣勤は、こうした「国家否定と反戦の結合」した思想を「日本人の愛国主義を否定するものであり、思想的には内村鑑三を乗り越えている」<sup>14)</sup>と高く評価している。また、同じ脈絡で栗田は「有島は戦争の政治性を意識し、意識するからこそ、やがて『国民国家』と近代ナショナリズムそのものを一例えばヘーゲル『歴史哲学』批判という形で一理念的にも批判しうる発想に接近できたのである」<sup>15)</sup>と評価した。

有島はアメリカ留学を通して、漠然とした国家嫌悪から、思想に基づいた反国家主義、無政府主義となっていった。有島は「其後氏の著書を彼れはれ漁り居り候中に、敬意は懐かしさに変わり行き、英国に渡る機会あらば氏の家屋の下に一度此身を運び行くべしと思ひ居候」と書き、実際に留学を終えて帰国する前の1907年2月3日にロンドンのクロポトキン宅を訪ねて行っている。その時の内容は評論「印象」「主義及び思想」の中に詳しいが、有島はクロポトキンに『相互扶助論』についていくつかの質問をし、その説明を聞いている。そして、クロポトキンは有島に幸徳への直筆の書簡を託したので

13) 栗田廣美はイブセンの「State musut go.=国家廃絶」の思想の影響について言及している。また、有島はワシントン市国会図書館で、主にイブセン、トルストイ、ツルゲーネフ、ゴーリキー、ドストエフスキー、プランデス、ハウプトマンらの本を読んだことが調査によってわかっている。

栗田廣美、『死と跳躍・有島武郎の青春』,右文書院, 2002, pp.365-367 参照

14) 西垣勤、「有島武郎と近代文学 ートルストイ、ゴーリキー、ラスキン、ラファエル前衛と啄木、志賀、漱石-」、『有島武郎と作家たち』、右文書院、1996

15) 栗田廣美、『亡命・有島武郎のアメリカ』、右文書院、1998、参照

あった。帰国後、有島が実際に幸徳にクロポトキンからの書簡を渡したか否かは定かではないが、信奉者として帰国したことは間違いない。

以上、見てきたように、有島の国家観はこうしたこうした経験を経て、段階を踏まえながら確固たるものとなったと言えよう。資本主義に根ざした帝国主義国家の「ナショナリズム的野望」を見抜き、それを越えた視点を獲得していたと見ることができると、思う。有島のこうした認識は当時の朝鮮に対する理解にも通じていた。

### 3. 朝鮮に対する認識

有島が日露戦争を中国・朝鮮の権益をめぐる戦争だと認識していたことは、多くの知識人が帝国主義の政策に同調していたことを考えると異例であったと言えよう。日本の朝鮮の支配に対して否定的だったことは、彼の書簡や日記などを通して知ることができる。すでに何人かの研究者によって指摘されている内容であるが、加筆して、もう一度ここに明記しておくことにする。

「縦令此度の戦が日本の勝利となりて決着すると、日本が堂々と朝鮮の独立を保全せんは小子の日夜祈居候所に御座候」(家族宛書簡、1904.2.28)

「余りと云へば傲慢不遜なる露西亜之措置、日本が堪忍之緒を絶ち申候は決して事を好むにのみ出でたるに候はざるは明白にて、拳国が遂になき熱誠一致をなせるも理りなりと存申候」と前置きをし、「此上は何卒時局早く取り我が国が事を挙げし其実朝鮮支那之独立を露国に承認せしむる行せられ極東の何処にも彼の狼等の跋を再びせざらしめん事を祈居申候」(家族宛書簡、1904.4.1.)

この内容を読むと、朝鮮の独立をひとえに願う有島の思いがひしひしと伝わってくる。

また、アメリカ留学から帰国して2ヶ月程たった1907年7月18日、有島はスイス人女性ティルダ・ヘックへの手紙でこう書き送っている。

「あのつまらない愛国心－実際は国民的な偏見に過ぎませんが－を打破しない限り、我々は万人が兄弟同胞である状態など全く望むべくもありません。我が国と朝鮮との関係については、詳細にお話するのも恥ずかしいです。朝鮮を助けるという口実のもとに、日本はかの国を強く支配して、その内閣を傀儡にしてみましたのです。」(ティルダ・ヘック宛書簡、1907.7.18)

1907年6月、韓国皇帝の高宗がハーグ国際会議に密使を派遣し、国際社会に日本の不当な支配を訴えようとした。そうした経緯を知った有島は、その感想を手紙にしたためてヘックに送ったのである。結局、この試みはうまく行かず、伊藤博文はその責任を高宗に取らせて7月19日に譲位させてしまった。そして25日には日韓新協約を締結させて、事実上の植民地化を実行したのである。こうした状況に憤慨した有島は、その思いを日記に綴っている。

「韓国大、××の政府が××を韓国に振ふを訴へるの密使を平和会議に派してより、事あれかしと待ち設けたたりし××は急転直下の勢を以て其施設を変じたり。韓王は内閣大臣の懲懲に従ひ、責を引くとし称して位を××なる皇太子に禪り、皇太子は略礼を選んで其の暁明踐位の事をはたせり。(中略)日本の権威は漸く韓国の上に加はらんとす。韓国は死に瀕せり。」「観想録」、1907.7.26)

日本の朝鮮支配に対する憤怒が感じられよう。有島は他の知識人とは違いインターナショナルな視点で日本と朝鮮の関係を観ることができた。日韓併合が強行された時も、その思いを弟の生馬に書き送っている。

「日韓併合、併合とはよき名を思ひつかれ候ものかな。当局者の苦心此名によりても さこそと思ひやられ申候。問題が大きすぎる故か、生は何と云ふべき言葉を不知、草々。」(有島生馬氏宛書簡、1910.10.8.)

日本政府の行った日韓併合を皮肉をこめて語っている。そして「生は何と云ふべき言葉を不知」と言葉が見当たらないほどの絶望感を感じていた。

かつて山田昭夫は「国家権力のピラミッド型構造の頂点にある天皇及び皇太子辺の批判的視力がうかがえないではない」と有島の反国家的な姿勢を指摘し、「天皇制絶対主義国家たる日本の国家構造」<sup>16)</sup>に疑問を持っていた、と評した。留学期を通して思想的にも確固たる信念を抱いて帰国の路についた有島であったが、帰国後、1910年6月に天皇暗殺の容疑で多くの無政府主義者が逮捕され幸徳秋水ら12名が処刑された「大逆事件」<sup>17)</sup>が起きた。これは有島にとっては他人事ではなかった。その後、白樺派の同人として執筆活動を始めた有島ではあるが、直接的な国家批判や政府批判をせず、沈黙を守った。朝鮮に対する思いも、異国の地に住むヘック、身内の生馬、そして日記と、秘密が守られるものだけに限定され、表立った発言はなされていない。有島の反戦あるいは反国家思想は作品を通して暗喩的に語られるのみであり<sup>18)</sup>、それは朝鮮についても同様であった<sup>19)</sup>。

明確な発言を控えていた有島ではあるが、朝鮮では当時のどう評価されていたのだろうか。すでに金希貞の指摘にあるように<sup>20)</sup>『서울(ソウル)』の1920年9月号に「日本思想界의 分野(日本思想界の分野)」と題して有島と武

16) 山田昭夫、「有島武郎の精神構造の問題」、『有島武郎・姿勢と軌道』、右文書院、1979、p.22

17) 多数の社会主義者・無政府主義者が明治天皇暗殺計画の容疑者として逮捕され、そのうち26名が大逆罪で起訴され、4名を除いて証拠のないままに死刑宣告を受け、翌年、幸徳秋水ら12名が処刑された事件。この事件を契機に社会主義者は徹底的に弾圧され、一時ほとんど活動できない状態となった。

18) 事件直後に書かれた『かんかん虫』『叛逆者』『或る女のグリンプス』等には大逆事件の影響が色濃く見られる、と指摘されている。「かんかん虫」に大逆事件の影響を指摘しているのは、上杉省和・田辺健三・山田昭夫・奥田浩司などの研究者である。また、「叛逆者」では、前記の田辺・奥田の外に福田準之助・栗田廣美などが事件との関係を示唆している。「或る女のグリンプス」では、福田準之助・高山亮二などが事件と作意との関係について言及している。

19) 奥村裕次、「有島武郎と反戦・反国家主義」、『일본연구』第41号、2009.9 参照

20) 金希貞はこの記事についての記述の他にも、当時の有島のイメージについて詳しく説明している。前掲書 pp.226-229

者小路実篤一派についての記事が出ている。ここでは二人は「人道主義者」「夢想的な社会主義者」と紹介されている。有島は人道主義者として受け入れられ、その作品に心動かされた青年たちが少なくなかった。

また、1923年4月の『開闢』第34号で黄錫禹は「現日本思想界의特徴과그主潮(現日本の思想界の特徴とその主潮)」で人道主義の主要な人物として有島武郎と武者小路実篤一派を挙げているが、その中で有島の思想が最近になって左寄りになって来ていることに注目している。

此에屬한 그 主要한人物은有島武郎 武者小路実篤一派와有名한神戸貧民窟의神賀川豊彦等이다. 그러나有島氏의思想은近頃에는稍히赤色の抵抗性を쇠여가며賀川氏의그活動의天地는漸次縮小되어가는模樣이다.<sup>21)</sup>

此に屬し、その主要な人物は有島武郎、武者小路実篤一派と有名な神戸貧民窟の神賀川豊彦などだ。しかし、有島氏の思想は近頃では稍な赤色の抵抗性を示しながら、賀川氏の活動の天地は漸次縮小されていく模様だ。〈拙訳、下線：筆者〉

有島が人道主義者であり、思想的には左傾向にあることが紹介されていた。当時、天皇制に反対する日本の左派と日本からの独立を願う朝鮮の人達とは、ある意味共通の敵を持った同士だった。彼らにとって有島は「親密感のある人」であったことは間違いない。このことは有島との交流関係と少なからず関わりがあるようだ。次に、交流のあった人物を具体的に見ていくことにする。

#### 4. 朝鮮人との交流関係

管見の限り、これまで有島と直接交流のあった人物についての詳しい調査はない。今回、有島の手帳に記録されている人物、および日記に記されてい

21) 黄錫禹, 「現日本思想界의特徴과그主潮」, 『開闢』第34号, p.42

る人物について、できる限りの調査を試みることにする。

#### 4.1 住所録に記録された人物

##### ① 李弼昊(이필호)

有島の住所録手帳には二人の朝鮮人の名前が記載されている。一人は李弼昊(이필호)で、もう一人は蔡順秉(채순병)である<sup>22)</sup>。

李弼昊は「在東京朝鮮苦学生蛩雪」の会長を歴任した李弼昊だと考えられる。「苦学生蛩雪」は海外にいる苦学生の相互親睦を目的とした組織で、1921年12月に創立された。創立当時の役職は、会長が李弼昊、総務に鄭命源、内務部長に李相鳳、外務部長に李祥鉉、文化部長に柳震杰、財務部長に柳淵杓、商事部長に李鍾模、議事部長に崔永福<sup>23)</sup>などで、李弼昊はその初代会長だった。

李弼昊はまた1921年8月17日に「학생대회강연단(学生会講演団)」の一員として三壽(朝鮮)で講演を行っている<sup>24)</sup>。彼は知識人・文化人として自分の役割を果たすため努力を惜しまなかった。ただ残念なことに、翌22年8月11日に若くして他界している。有島とどれほど親しく、またどんな関係であったかを知る資料は残っていないが、有島が手帳に名前を書き控えておいたことを考えると、ただの訪問者ではなかったことは確かだ。

##### ② 蔡順秉(채순병)

では、蔡順秉とは誰なのだろうか。同時代の人物を調べていくと1904年生まれの濟州道出身の独立義士・蔡順秉が浮かび上がってくる。彼は独立運動

22) 李弼昊の住所は「外戸塚655 伊藤方」で、蔡順秉の住所は「中渋谷六九二磯部方」となっている。

有島武郎, 「住所録手帳」, 『有島武郎全集』第十五卷, 筑摩書房, 1988, p.106

23) 「苦学生蛩雪」, 한국민족문화대백과(韓國民族文化大百科) <http://encykorea.aks.ac.kr>

24) 東亜日報 (1921年8月17日)付け記事

をした後、1922年に学業を続けるために日本に渡っている。では日本に渡った後の足取りを調べてみよう。佐藤由美の「青山学院と戦前台湾・朝鮮からの留学生」<sup>25)</sup>の中に「青山学院の寄宿舎内には、朝鮮留学生で組織する青山倶楽部（1916年5月8日創部）があったほか、蔡順秉、金允植が「要視察朝鮮人」としてマークされていた」という記述があり、蔡順秉の名が出てくる。佐藤はその裏付け資料として「第十三要視察朝鮮人要覧」<sup>26)</sup>をあげ、蔡順秉と特定している。この資料には「全羅南道 / 乙 / 蔡順秉 / 二一」と記載され、濟州島出身の独立義士・蔡順秉の出生と一致しており、蔡順秉は日本に渡り、青山学院大学で学んでいたことが確認できる。

それでは有島の手帳に残された蔡順秉はどうだろうか。有島の手帳の蔡順秉の住所は「中渋谷六九二磯部方」となっており、これは青山学院大学の住所(東京都渋谷区渋谷4-4-25)から近いところだった。彼は大学の近所に下宿していたと考えられ、有島の手帳に残された蔡順秉と、濟州道出身の青山学院生・蔡順秉が同一人物だと推定される。

蔡順秉についてももう少し詳しく見ていくことにしよう。蔡順秉は兩班の蔡洙鎔の息子として生まれ、兩親の配慮で京城に上京し、私学の国語普通科で学問を学んだ。そして1919年、学生という身分で3・1独立万歳運動に参加した。同年3月4日には「明日午前8時30分に南大門駅前第二独立万歳運動を行うので、太極旗を持って集まれ」という内容のビラを400枚作り、同志3名と共に配布した。そして翌日、住民を動員し、南大門駅前を「独立万歳」と叫びながら行進した。その際、毎日新報社の前で警官隊に捕まり、牢獄行

25) 佐藤由美, 「青山学院と戦前台湾・朝鮮からの留学生」, 『日本の教育史学』, 47巻, 2004, p.163

26) 「第十三要視察朝鮮人要覧」, 警視庁特別高等課内鮮高等係『事務概要』, 大正十三年九月末日調査 「全羅南道 / 乙 / 蔡順秉 / 二一」

蔡順秉の出生地は記録によると全羅南道濟州島城内となっている。当時、濟州島は全羅南道だった。また「第十三要視察朝鮮人要覧」が大正13年(1924年)の資料で、1904年生まれ蔡順秉は数えの21歳であり、年齢的にも一致する。1922年死亡という記録があるが、1924年の「第十三要視察朝鮮人要覧」に蔡順秉の名前が明記されていることから、こちらが信憑性が高いと判断した。

となった。そして同年11月6日、京城地方法院で懲役10ヶ月の刑を宣告されたが、これを不服として反訴した。結局、未決の期間を含め1年3ヶ月の間、牢獄生活を送ることになったが、1920年5月14日に釈放されている<sup>27)</sup>。そしてその後、日本に留学して青山学院大学で学業を続けたものと思われる。

その後、日比谷公園で自殺を試みたことが1925年10月10日の東亜日報の記事に出ている。少し長いが、全容を翻訳してみることにする。

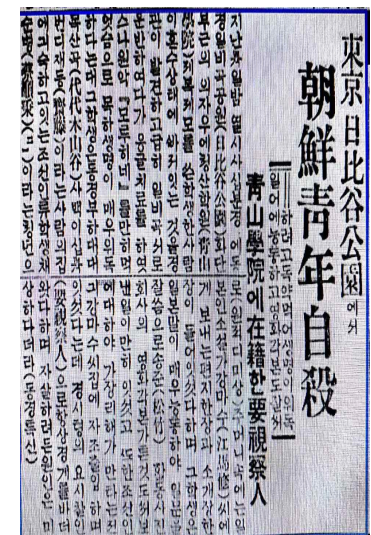
### 東京日比谷公園で朝鮮青年自殺

=しようと毒薬を飲んで危篤、日本語が堪能で、映画の脚本も書く

#### 青山学院に在籍した要視察人

<1925年10月10日, 東亜日報記事>

去る6日夜10時40分ごろ、日比谷公園の花壇付近の椅子の上に青山学院の制服を着た一人の学生が昏睡状態に陥っているのを警官が発見し、急いで日比谷署に運んだで応急処置をとったが、大量のモルヒネを飲んだので、現在、命が非常に危険な状態だ。学生は東京の代々木山谷の齊藤という人の家に下宿している朝鮮人留学生・蔡順秉(二一)という青年で(本籍不詳)ポケットの中には日本人小説家の江馬修氏への手紙一通と紹介状一枚が入っていたという。その学生は日本語が非常に堪能で、松竹の活動写真株式会社映画脚本を書いて送った事も何度



もある。また朝鮮人に対する理解が深いという江馬修氏の家によく出入りしており、警視庁の要視察人として常に警戒されていたという。自殺しよう

27) 蔡順秉, 『大韓民国独立遺功者功勳録』(1991), pp.491-492 参照

とした原因は不明である。〈拙訳〉

この記事から蔡順秉がどんな人物だったかある程度わかる。まず日本語が堪能で映画の脚本を書いて送るほどの実力だったこと、江馬修と親しくてよく家に入出入りしていたこと、警視庁の要監視人物で警察に絶えず尾行されていたこと、モルヒネを飲んで自殺を図ろうとしたこと、など。

その中で、まず江馬修についてみていこうと思う。江馬修(1889年-1975年)は、1916年に長編『受難者』がベストセラーとなって有名になった作家である。彼は社会主義者で、当時日本の植民地にあった朝鮮や台湾に対して深い理解を示していた。特に、1923年9月1日に起きた関東大震災当時の朝鮮人虐殺をモチーフにして小説『羊の怒る時』『血の九月』<sup>28)</sup>を書いており、これは一読の価値のある作品である。また1926年にヨーロッパに渡り、帰国後『戦旗』に属するプロレタリア作家として活動した。その後、1946年には日本共産党に入り、飛騨地区の委員長となっている。実は江馬修は日本よりも中国で名が知れ、大正期の中国知識人に人気があった作家の一人だった<sup>29)</sup>。

蔡順秉はこの「朝鮮に対する理解が深い江馬修」の家をたびたび訪れていた。有島と江馬とは共通点が多く、蔡順秉のこうした交流関係は興味深い。

次に蔡順秉が日本語が非常に堪能であった点について検証していくことにする。蔡順秉は玄鎮健<sup>30)</sup>の『불』(1925年発表)を『火事』と題し日本語に翻訳して発表している<sup>31)</sup>。この翻訳を見れば蔡順秉がどれほど日本語の実力が

28) 関東大震災を題材とした小説「羊の怒る時」があり、「血の九月」はこのいくつかの章を利用してたもの。1930年に書かれ、諸所の事情により1947年に出版された。

29) 李雪は「周作人をはじめ、中国の近代文学の成立に大いに貢献した中国の代表的な近代作家である張資平(1893-1959)、陶晶孫(1897-1952)、郁達夫(1896-1945)らほみな江馬修の文学に関心を寄せて、中国に翻訳・紹介をした」と述べている。

李雪,「江馬修と中国との関わりについて」,『紀要論文』(千葉大学), 2015.02

30) 玄鎮健(1900.8.9.-1943.3.21)は朝鮮の短篇小説作家。玄の作品は客観的現実に眼を向けたりアリズムであり、日帝の支配下のシンボリック作家であった。(ウィキペディア・フリー百科事典)

31) 玄鎮健 著/蔡順秉 譯,「火事」,『近代朝鮮文学日本語作品集:1901-1938 創作篇

あったかは一目瞭然である。また「朝鮮の近世文学と現代文学」<sup>32)</sup>と題して朝鮮の文学について詳しく説明している。もともと朝鮮で国語普通科に通っていた蔡順秉はこの分野に詳しく、朝鮮文学について紹介したいという思いが強かったと考えられる。

また、朝鮮の「갈등」<sup>33)</sup>創刊にも協力し、「不平斗 吾人の 見解」という文を投稿している。「갈등」は1922年8月25日付で創刊された朝鮮苦学生「갈등」会の機関誌で、苦学生団体に発行された雑誌としては内容が濃かった。当時の「갈등회」が社会でどのような囑望されたかは、1921年11月にワシントンで開催される5大列強会議に独立を真にする民族代表団体の中に「갈등회」が入っていた事実からもわかる。蔡順秉はこうした団体の活動にも積極的に協力し、朝鮮の民の啓蒙にも力を注いだ。

以上、有島との交際のあった蔡順秉について見てきた。彼は独立運動にも参加し、常に要注意人物として警視庁要員に尾行されながらも朝鮮の日本からの独立を渴望してさまざまな活動を行っていた人物であった。

## 4.2 日記(観想録)に記録された人物

有島の日記である「観想録」には一人の朝鮮人の名前が残されている。

「雨、朝新着之雑誌類を乱読する。里見の白醉亭漫記は中々面白い。李英室來つてまた金を貸せと言ふ。ほとほといやになる彼の依頼心。」(1922年7月5日)<sup>34)</sup>

この記述からは、いかばかりか否定的なニュアンスが感じ取れる。ここで

1』, 緑蔭書房, 2004, pp.103-107

32) 蔡順秉,「朝鮮の近世文学と現代文学」,『近代朝鮮文学日本語作品集:1901-1938 創作篇 1』, 緑蔭書房, 2004, pp.109-114

33) 朝鮮苦学生「갈등회」が主となり,1922年8月に「갈등」を創刊した。著譯編者は崔鉉

34) 有島武郎,「観想録」,『有島武郎全集』第十二卷、筑摩書房、1982, p.325

名前が載っている李英室(り・えいしつ)とは、如何なる人物なのだろうか。「室」を使った「英室」という名はめずらしくほとんど見当たらない名前であり、当人物を探す手がかりは今のところどこにもない。しかし、ここで留意したいのは、李英實(り・えいじつ)という似た発音の人物が、留学生として当時、東京にいたという事実である。もしかしたら、有島が「室」と「實」を間違えて記憶していたか、あるいは間違えて記入をしたのではないだろうか。当時、朝鮮人の名前は、漢字を日本語読みにして呼ばれていたが、彼らが日本語を発音するとき「實(じつ)」が清音と濁音の区別が不十分なため、「室(しつ)」と聞こえた可能性は十分にある。つまり「英室(えいしつ)」ではなく「英實(えいじつ)」ではなかったのか、ということである。

李英實<sup>35)</sup>という人物は留学生として東京に来日し、有島が自殺した直後に朝鮮に帰国している。彼は慶尙南道の出身で、当時、要注意人物として警視庁に監視されていた。いわゆる抗日学生で、日本では人參行商などを行いなから資金を調達していたことがわかっている。また、李英實については次のような資料が残っている。

ㄷ 在東京 韓人苦學生의 一部는 既設 朝鮮苦學生同友會의 性質이 漸次 惡化하는 現況을 憤慨하여 이에 螢雪會라 稱하는 純粹한 勞働團을 創設하여 同友會로 하여금 自滅 倒壞케 하려고 企圖하고 中央大學生 李英實(人參行商) 新聞配達夫 柳震杰의 2者는 螢雪會 創設計劃에 着手하여 이미 同志 20餘名을 糾合하고 目下 奔走中인데 此舉를 안 同友會 專務理事 林澤龍 외 黃錫禹 등 役員 一同은 甚히 이를 激昂하여 林澤龍 외 數名의 幹部는 去月 28日 李英實을 訪問하고 其理由를 訊問한 위에 威迫的 罵倒를 하고 爾來 暗闘中에 있는 등은 其 例이다. (1921年12月16日) <sup>36)</sup>

また、在東京韓人苦學生の一部は、既設の朝鮮苦學生同友會の性質が漸次悪

35) 李英實は慶尙南道の出身で、当時、要注意人物として警視庁の監視対象であった。中央大学学生。

『在京朝鮮人状況』、朝鮮總督府警務局東京出張員

36) 「朝鮮總督府 警察局이 報告한 抗日獨立」, 『朝鮮獨立運動 第3卷 民族主義運動 編』 국사편찬위원회(国史編纂委員會) 한국사데이터베이스 <http://db.history.go.kr>

化する現況に憤慨し、螢雪會と稱する純粹な勞働團を創設して同友會を自滅・倒壞させようと企圖した中央大學生の李英實(人參行商)と新聞配達夫の柳震杰の二人は螢雪會の創設計劃に着手して、すでに同志20餘名を糾合して、目下奔走中であるが、この企てを知った同友會 專務理事の林澤龍の外、黃錫禹など役員一同はこれに激昂して林澤龍の外 數名の幹部は先月の28日に李英實を訪問して、その理由を訊問した上に威迫的に罵倒して以来、暗闘中にあるのがその例である。<拙訳、下線: 筆者>

これは1921年12月16日の「朝鮮總督府警務局が報告した抗日獨立」の報告書であるが、この記述から、李英實が「螢雪會」の創設を推進した人物であったことがわかる。当時、螢雪會(1921年12月創立)の会長が李弼昊(有島の手帳の住所録に名前が記述されている人物)であったことからして、李英實と李弼昊は当然知り合いであり、だとすると有島の自宅を訪ねて行ったのが李英實だったという可能性が高い。

李英實は有島の死後、1923年3月に中央大学を卒業し、帰国した後アメリカに留学に行く予定となっていた<sup>37)</sup>。また「在京朝鮮人状況」<sup>38)</sup>の記録によれば「大正12年(1923年)11月帰鮮」したことになっている。そこまでは確認できるが、残念ながらその後の足取りについては不明で、明確なことはわかっていない。この点については追加調査が必要かと思う。

朝鮮の留学生達がこぞって有島を訪ねてきたことは、有島の日記などを見ればわかる。有島は自らを頼ってくるものを拒まず、できる限りで援助を行っていた。しかし、それは単なる人道主義的なhumanitarianとしての行動というわけではなかったように思う。有島は帝国主義及び植民地政策に反対だった。彼らへの資金援助はその信念に基づいた行動だったと考えていいのではないか。有島には朝鮮に対するはっきりとした発言はないが、しかし、こうした有島の交際関係から彼の信念を読み取ることができる、と思う。

37) 1923年4月16日の東亜日報に「李英實氏 今回 東京中央大学을 卒業하고 米 國에 留學할 予定으로 昨日入京」という記事が出ていて、その消息を伝えている。

38) 「在京朝鮮人状況」, 朝鮮總督府警務局東京出張員, 1924. 5, p.53

### 4.3 朝鮮と関係の深かった人物

有島と関係のあった人物として、天皇暗殺を企てたとして無期懲役になった朴烈<sup>39)</sup>とその妻・金子文子(1903-1926)がいる。二人は日本帝国主義打倒の同志であった。1922年4月末か、5月に東京府荏原郡世田谷池尻の下駄屋の相川新作の二階の六畳間を借りて同棲を始め、共に活動を行い、1922年7月10日付けで黒涛会の機関誌『黒涛』を創刊するに至った。だが黒涛会は1922年11月に分裂し、朴烈、洪鎮裕などの無政府主義者は新たに黒友会を組織し、同年11月に『太い鮮人』を創刊した。しかし活動のための資金が不足していたため、文子は生活費と同誌の発行のために高麗ニンジンの行商をしたがそれでも足りず、資金集めとしてカンパを依頼して歩いた。そして有島の自宅にも訪れ、お金を受け取っていたことがわかっている<sup>40)</sup>。文子は裁判で「トンナ人カ被告等ニ好意ヲ有シテ補助シテ呉レテ居タカ」との質問に「有島武郎辺リデス」と答えている<sup>41)</sup>。

有島は文子に資金を渡していたわけだが、後に文子と朴烈が反逆罪で捕まり、無期懲役の罪に問われたことを考えると、非常に危険な状況に足を踏み入れたことになる。有島が資金を渡したのは、朝鮮の活動家だけではなく。当時、日本の活動家たちも有島に活動費を受取りに訪ねてきていたし、1923年6月には中浜哲<sup>42)</sup>、河合康左右、小田栄らが資金援助のために有島邸

39) 朴烈(パク・ヨル、1902年2月3日-1974年1月17日)は、大正時代の朝鮮の社会運動家、ニヒリストで、無政府主義者である。本名は朴準植(パク・ジュンシク)と言ひ、朴烈は書名。在日本大韓国民団の初代団長で、韓国に帰国後、朝鮮戦争で捕虜となって北朝鮮に連行され、容共思想矯正された。詳細不明だが、そこで後に処刑されたと言われている。

40) 山田昭次は『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』の中で、金子が有島から資金援助を受けていたことを明らかにしている。

山田昭次、『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』、影書房、1996

41) 金子文子の『裁判記録』、p.269

42) 1913年に摂政宮裕仁(昭和天皇)の暗殺計画の前段として行った大阪・北浜銀行員殺人事件の首犯として逮捕され、15年絞首刑に処せられた。(20世紀日本人名事典 参照)

を訪れていることがわかっている。そして、有島が死ぬ直前の6月8日、彼らは小切手を受け取った<sup>43)</sup>。江口渙は「河合が摂政暗殺の目的を有島に告げた」と証言しており、それが正しければ有島は何に使うかその目的を知らなから資金を援助したことになる。もし有島が情死しないで生きていたとすれば、後々問題になったに違いない。これは「大杉栄に密航費用を渡したとは比較にならないくらい危険な行為であった」<sup>44)</sup>と言えるだろう。

以上、当時の朝鮮と関連のある人物について見てきたが、有島の交流関係には一つの傾向がある。朝鮮独立のために何らかの活動していた人物が主で、有島はその良き理解者であるとともに資金援助をしてくれるパトロン的存在であった。勿論、有島はその全ての人を肯定的に見ていたわけにはいかない。例えば「李英室來つてまた金を貸せと言ふ。ほとほといやになる彼の依頼心」と日記に書いた通り、たびたび資金援助を要求することに対して「ほとほといやになる」と心情を吐露している。彼らの主張や行動には同意していたものの、その方法に関しては必ずしも肯定的だったとは言えない。人に頼るばかりで自立できず、ただ活動費だけをせびりに来る者に対しては嫌気がさしていたのも事実だった。しかし、そうした面があったものの、全般的にいつてそうした活動家に協力的だった。

左翼思想やこうした交流関係のせいで、有島は危険人物に分類され警察のマークを受けていた。そのことは、妹・有島章の回想録からも確認できる。

最後に家を出られてお帰りのなかった晩は母上も大変心配していらっしやいましたが、翌日だったでしょうか、じきに帰るから心配しないよという文面の葉書が届きました。母上はアカのシンパの疑いで警察に捕まったのではないかと、そればかり言っていたらっしやいました。というのも、兄上は来客との面接の日を金曜日に決めておられました、なかには当時アカと呼ばれた人達もいて、そういう人達は寄附を集める為に来ていたということだったからです<sup>45)</sup>。<下

43) この点については佐々木靖章の「有島武郎とアナーキストの仲間達」に詳しい。

佐々木靖章、「有島武郎とアナーキストの仲間達」、『有島武郎と作家たち』右文書院、1996、pp.217-220

44) 上掲書、(注43) p.217 参照

線：筆者>

「大逆事件」がどういう性質のものかをよく理解していた有島は、こうした行為が如何に危険であるかを理解していたはずである。そのお金の使い道を知りながら資金を渡したということは、ひょっとしたら有島はすでに死を視野にいれていたのかもしれない。それほど危険な行為だった。

## 5. おわりに

有島の国家観と思想、および朝鮮人との交流関係を中心に見てきた。有島はもともと日本という国家の在り方に否定的だったが、軍隊生活を通してそれは確かなものになり、さらにアメリカ留学を通して思想的にも明確になっていったと考えられる。またアメリカ留学期に金子喜一の影響でクロボトキンの無政府主義に傾倒していった。そして、思想的な拠所をつかんだ有島は、資本主義国家のナショナリズム的野望を見抜き、批判的視野を獲得することができた。それゆえ他の日本政府に寄り添う知識人と異なり、有島は日韓併合を断行する政府に憂慮し、植民地政策を批判していた。また、朝鮮に対しても他の知識人とは違った対応をしていたのは間違いない。

本稿では更に、晩年の交流関係についても見てきた。有島と交流のあった朝鮮人の中で確認が可能なのは、手帳に記録されている李弼昊と蔡順秉、日記に名前が出てくる李英實の3人だった。また直接の交流は確認できないが、朴烈が妻・金子文子との関係から挙げられる。彼らは一様に朝鮮の独立のために何らかの活動していた人物だった。有島は彼らにとって頼れる人であると共に、情的に近い人であった。更にお金も持っており、資金援助を頼むには最適の人だったと言えよう。彼は一貫して植民地政策には反対で朝鮮に同情的であったが、残念ながらそうした考えを物に書いたり公言すること

はなかった。かつてトルストイの反戦記を読んで感銘を受けたものの実行に移せない自分にジレンマを感じたように、こうした葛藤は晩年まで続いていたようだ。もしかしたら、活動家を援助することは、有島にとって自分のできる最大限の実行・行動であり、自らの意思表示だったのではないか。朝鮮留学生との交流関係を調べていく中、そんな考えにさせられるのである。

45) 有島章, 「晩年の武郎兄上」, 『有島武郎全集』第八巻付録月報6, p.4

## [Abstract]

Takeo Arishima and Chosun(Korea)  
 - Focusing on Interaction on Relations -

Okumura, Yuji

Takeo Arishima (1878-1923) was a humanitarianist, and it is known that he believed in anarchism ideologically. Therefore, he consistently criticized the imperialistic policies of the Japanese government since the Meiji Restoration. Unlike intellectuals at that time, they had different perceptions of Chosun(Korea). In this paper, we will examine the view of the nation of Arishima and its philosophy, and comprehend how Chosun(Korea) was perceived at that time. Then, we looked at the relationship between the Chosuns(Koreans) and Arishima, which had not been concretely examined.

Among the Chosuns(Koreans) who exchanged with Arishima, three were Lee Pil-ho, Chae Soon-byeong and Lee Young-sil, whose names were listed in the diary. They were all figures who worked for Chosun's independence. Arishima consistently opposed Chosun's colonial policy, but he did not declare that idea. However, recognizing that it was a dangerous act, and supporting them was based on his beliefs, and I think it was the maximum action Arishima could take.

**Key words:** Chosun(Korea), anti-nationalism, anarchism, independence of Chosun, Lee Pil-ho, Chae Soon-byeong, Lee Young-sil

## 参考文献

## □ 基本資料

有島武郎, 『有島武郎全集』, 筑摩書房, 1982-1988

## □ 単行本

栗田廣美, 『亡命・有島武郎の青春』, 右文書院, 1998

栗田廣美, 『死と跳躍・有島武郎の青春』, 右文書院, 2002

山田昭次, 『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』, 影書房, 1996

『大韓民国独立遺功者功勳録』, 1991

## □ 論文 その他の資料

金希貞, 「한국에 있어서의 아리시마다케오(有島武郎)의 수용양상」, 『日本語文学』第70輯, 2016

蔡順秉, 「朝鮮の近世文学と現代文学」, 『近代朝鮮文学日本語作品集:1901-1938 創作篇1』, 緑蔭書房, 2004

玄鎮健著/蔡順秉譯, 「火事」, 『近代朝鮮文学日本語作品集:1901-1938創作篇1』, 緑蔭書房, 2004

黄錫禹, 「現日本思想界の特徴과 그主潮」, 『開闢』第34号, 1923

新渡戸稲造, 「日本帝国の膨張」『太陽』(1904.10.16、12.1) 『雑誌にみる近代日本の朝鮮認識1』, 緑蔭書房

西垣勤, 「有島武郎と近代文学 ートルストイ、ゴーリキー、ラスキン、ラファエル前衛と 啄木、志賀、漱石-」, 『有島武郎と作家たち』, 右文書院, 1996

李雪, 「江馬修と中国との関わりについて」, 『紀要論文』(千葉大学), 2015

佐藤由美, 「青山学院と戦前台湾・朝鮮からの留学生」, 『日本の教育史学』47巻, 2004

佐々木靖章, 「有島武郎とアナーキストの仲間達」, 『有島武郎と作家たち』, 右文書院, 1996

有島章, 「晩年の武郎兄上」, 『有島武郎全集』第八巻付録月報6

山田昭夫, 「有島武郎の精神構造の問題」, 『有島武郎・姿勢と軌道』, 右文書院, 1979

奥村裕次, 「有島武郎と反戦・反国家主義」, 『일본연구』第41号, 2009

「朝鮮総督府 警察局이 報告한 抗日獨立」, 『朝鮮獨立運動 第3卷 民族主義運動編』국사편찬위원회(国史編纂委員会)한국사데이터베이스 [http://db.history.go.kr]

「苦学生 螢雪」, 한국민족문화대백과(韓國民族文化大百科) http://encykorea.aks.ac.kr

「在京朝鮮人狀況」, 『朝鮮總督府警務局東京出張員』, 1924. 5  
ウィキペディア・フリー百科事典

이 논문은 2018년 11월 14일 접수되어 12월 07일까지 심사받아 12월 17일 게재 확정됨.